夢枕獏に関する仰天情報誌

仰天夢枕獏

広告特集

企画・制作
朝日新聞社広告局

通巻37号

『仰天・夢枕獏』通常号は、夢枕獏の文庫、新書、他の方との共著を除いた新刊（初刷分のみ）に挟み込みで発行しています。

朝日新聞　連休特別号

長編ハード・アクション第12弾

餓狼伝 XII

格闘小説の金字塔
史上最強は誰だ!!
『餓狼伝』のテーマはただひとつである。

本体　781円

餓狼伝 Ⅰ～Ⅷ　本体各762円
餓狼伝 Ⅸ～Ⅺ　本体各781円
青狼の拳〈餓狼伝秘篇〉　本体　762円

双葉社

肉体は豊饒である

夢枕獏

もし、この物語に対するぼくの自負があるとすれば、世界で一番長い格闘小説を書いているということである。一九八五年に書き出されて、別巻『青狼の拳』を合わせてすでに一三冊。一六年。まだ終っていない。まだ連載の途上である。まだ、書くことに飽いてない。

「おれとおまえとどちらが強いのか？」

これのみをただただひたすらに書き続けているのである。なんというシンプルな、太い物語であろうか。この宇宙に唯一存在するのは、意志ではない。自己の肉体であると、この物語の登場人物たちは叫んでいる。

主人公、丹波文七。身長一八二センチ。体重一〇五キログラム。

相手、無数。

「楽しいなあ、おい」

闘いのさ中に松尾象山は言う。

現代の宮本武蔵――剣豪小説はあり得るか、という問いの答が、この物語である。

肉体が、意志を創造する。肉体が宇宙を創造する。肉体が哀しみを創造し、勝利も敗北も、そして悦びも創造する。

書いても書いても、まだあらたな闘いのシーンが浮かんでくるのである。人が人を殴るシーンを、何十回、何百回となく書いて、まだ、書き足りない。まだ湧き続けてくる。肉体というのは、なんと豊饒な泉だろう。

肉体は、深い。

そのことに、いつも、書きながら驚き続けているのである。

文七、象山、姫川、堤、藤巻……、190万部を超えるベストセラーの魅力はキャラクターの個性にある。個性とは、彼らの肉体である。この世に、ひとりとして同じ顔がないことを思えばいい。頭は肉体の一部にすぎない。この社会は頭の個性を強調するあまり肉体の存在感を失っている。そういう社会に生まれた子どもはつらい。「餓狼伝」は消えつつある肉体を取り戻そうとする、誇り高い男たちの物語である。

担当編集者

人の心が生む、異形の"鬼"に対峙する安倍晴明。「陰陽師シリーズ」初の本格長編。

『陰陽師　生成り姫』

本体1400円
朝日新聞社

新作『鬼譚草紙』六月刊行予定
夢枕獏と天野喜孝のコラボレーション。エロティックな平安絵巻

『生成り姫』異聞

夢枕獏

『陰陽師』シリーズ中唯一の長編である。

源博雅の恋物語。

古典の中にある安倍晴明・源博雅のエピソードを、この本の中でもう一度、あらためて書いている。

『朝日新聞』でこの物語を連載する時、ここで初めて晴明や博雅のことについて読む方もいるであろうと思い、あえて、これまでに書いているエピソードも含め、ここに紹介することになったのである。それは、うまくやれたのではないか。

生成りというのは、嫉妬した女性が般若という鬼女に変貌するその途中の存在である。

鬼になりかかっている。人でもあり鬼でもあるが、鬼でもなく人でもない。なんと哀しい存在であろうか。

「そなたのことを想うと苦しいのだよ」

「歳をとられたそなたが愛しいのだよ」

「わたしは、鬼であるそなたが愛しいのだよ」

「あの頃、わたしはまだ、刻が永遠に続くものと思っていたのです」

博雅の台詞は、いつも胸に迫る。

『鬼譚草紙』のこと

平安時代を舞台にした、鬼の話である。

「エッチな話をやりましょう」

と、絵を描いてくださった天野喜孝さんと決めて始めた物語である。紀長谷雄や小野篁、菅原道真や蘆屋道満も出てくる。たいへんエッチである。

「だって、篁さまの指が、こんなに上手にいじるんですもの」

「昼間は、澄ました顔で筆を持っておいでになるその指で、この姫は何をしようとしていらっしゃるの」

「貴兄だって、これをこんなに大きくなさっておいでのくせに――」

何かを愛しすぎると、人は鬼になってしまうもののようである。これが、この話を書いてわかったことだ。

天職三昧の記

夢枕獏

書くことが、天職であると思っている。

書くことが好きなのである。原稿用紙の升目を万年筆の丸っぽい下手な字でぽつりぽつりと埋めながら、いずこかへ向かって旅を続けてゆくという作業が好きなのである。

最近わかったのは、売れる、売れないというのは、ぼくにとっては、ひとつの現象であり、風景のひとつであるということだ。売れれば嬉しいが、売れたから書いて、売れないから書くのをやめるということではない。これまで、二〇〇冊以上の本を書いてきた。その本の中には、申しわけないほど売れたものもあるし、申しわけないほど売れなかったものもある。今だって、売れているものも、売れてないものもある。しかし、売れている本も売れていない本も、ぼくには愛しい。

どうせ、一生書き続けてゆくのである。そのことは、もう、覚悟しているのである。ガキの頃から書いてきた。売れない頃から書いてきて、売れてるときも書いてきた。ぼちぼちである今も書いている。売れる、売れないというのは、一生書き続けてゆくという行為の途上にある様々な風景のひとつにしかすぎないのである。本は売りたい。たくさんの人に読んでもらいたい。読んだらほめられたい。そういう根源的な欲望は、間違いなくぼくの中にある。読んでもらうための努力はする。おもしろがってもらうために、力を惜しんだりもしない。一生書く。そのことがわかってしまった。もう、恐いものは何もない。

十年前、四〇歳になった時に、ある計算をした。死ぬまでに何冊本が書けるだろうか。

それまでと同じペースで、年に十冊。ぼくの好きな手塚治虫さんが亡くなった歳を基準にすれば、六十二歳までに、あと二二〇冊書けることになる。

©横山正美

その二二〇冊に、頭の中にある小説のアイデアを割り振ってゆく。あのアイデアで何冊。そうして計算をしていたら、なんと、二二〇冊では足りないことがわかってしまったのである。

愕然となった。

なんとおそろしいことに、一年に十冊ずつ書いていても、ぼくはぼくの頭の中にひしめいている全ての物語を活字にすることができないのだ。ぼくの寿命よりも、物語のアイデアの量の方が遙かに多いのである。ぼくは、ぼくの書きたい物語に優先順位をつけ、その順位によっては、ある物語について一行も書くことなく、この世を去らねばならないのである。

どうしたらいいのか。

アイデアはもう、一生分以上ある。ぼくにとって怖いのは、アイデアの枯渇ではなく、物語を書こうという意欲、リビドーの枯渇である。

この世に、それ一冊だけあればいい物語――今、死ぬまでには書きたいと思っている『最終小説』まで、ぼくのリビドーと寿命がもつのかどうか。

このとてつもない話『最終小説』の手がかりを、十年がかりでようやくつかんだ今、すぐにもそれに取りかからねばならないのだろうか。

しかし、今、書き続けている話はいっぱいあって、新しい話の割り込む余地はない。

「ああ、困った困った」

と言いながら、ごめんなさい、実はそれを楽しんでいるのである。

今、確信をもって言えることはただひとつである。

死ぬまで書きます。

それだけだ。

二〇〇一年五月　小田原にて

全て書くまで生きていたい。

夢枕獏

夢枕獏　作品リスト

※このリストは『仰天・夢枕獏』通巻37号協賛出版社より刊行されている作品です。掲載の順は社名50音順

◎朝日新聞社
●単行本　『陰陽師　生成り姫』（陰陽師シリーズ）

◎朝日ソノラマ
●単行本　完全版　『キマイラ Ⅰ』～『キマイラ Ⅱ』（以上、キマイラ・吼 シリーズ）
●文庫　『幻獣少年キマイラ』～『キマイラ　餓狼変』・別巻　夢枕獏：編
岩村賢治詩集『蒼黒いけもの』（以上、キマイラ・吼 シリーズ）
●コミック　作：夢枕獏　画：谷口ジロー『新装版　餓狼伝』

◎集英社
●単行本　『仰天・平成元年の空手チョップ』・『神々の山嶺』（上下）・『黒塚』
●文庫　『仕事師たちの哀歌』・『仰天・平成元年の空手チョップ』・『聖楽堂酔夢譚』・『純情漂流』・『絢爛たる驚』・夢枕獏：編著『奇譚カーニバル』・『神々の山嶺』（上下）・『慶応四年のハラキリ』
●コミック　作：夢枕獏　画：くつぎけんいち『怪男児』（1，2）
作：夢枕獏　画：谷口ジロー『神々の山嶺 1』

◎祥伝社
●新書　『魔獣狩り　淫楽編』・『魔獣狩り　暗黒編』・『魔獣狩り　鬼哭編』・『魔獣狩り外伝聖母陽陀羅編』・『魔性菩薩』（上下）・『美空曼陀羅』・『魍魎の女王』（上下）『黄金獣』（上下）・『呪禁道士』・『新・魔獣狩り1　鬼道編』・『新・魔獣狩り2　孔雀編』・『新・魔獣狩り3　土蜘蛛編』・『新・魔獣狩り4　狂王編』・『新・魔獣狩り5　鬼神編』・『新・魔獣狩り6　魔道編』（以上、サイコダイバーシリーズ）・『牙の紋章』・『牙鳴り』
●文庫　『魔獣狩り淫楽編』～『呪禁道士』（以上、サイコダイバーシリーズ）
『涅槃の王1』～『涅槃の王4』・『魔獣館』・『牙の紋章』・『牙鳴り』

◎双葉社
●単行本　夢枕獏：編著『闘人烈伝』
●新書　『餓狼伝 Ⅰ』～『餓狼伝 Ⅷ』・『餓狼伝秘篇　蒼狼の拳』（以上、餓狼伝シリーズ）
●文庫　『餓狼伝 Ⅰ』～『餓狼伝 Ⅹ』・『餓狼伝秘篇　蒼狼の拳』（以上、餓狼伝シリーズ）

◎文藝春秋
●単行本　『陰陽師』・『陰陽師　飛天ノ巻』・『陰陽師　付喪神ノ巻』・『陰陽師　鳳凰ノ巻』（以上、陰陽師シリーズ）・『鳥葬の山』・『瑠璃の方船』・『腐りゆく天使』
●文庫　『陰陽師』・『陰陽師　飛天ノ巻』・『陰陽師　付喪神ノ巻』（以上、陰陽師シリーズ）
『夢枕獏 少女マンガ館編』・『鳥葬の山』・『瑠璃の方船』

夢枕獏公式HP "蓬莱宮（ほうらいきゅう）"

作・夢枕獏　画・村上豊による書き下ろし絵物語
『陰陽師　瘤取り晴明』連載中 夢枕獏の「日々仰天」を筆頭に、掲示板、ゲストエッセイ、夢枕獏の新刊情報、連載情報など『仰天・夢枕獏』だけではフォローできない数々の情報と"蓬莱宮オリジナルコンテンツ"を掲載しています。

http://www.digiadv.co.jp/baku/

※蓬莱宮は会員制ですがフリーページも用意してあります

蓬莱宮イメージイラスト・寺田克也　ウェッブデザイン・宮崎宏一郎（株）デジタルアドベンチャー

『陶素人（とうしろう）』由来のこと

夢枕　獏

実は、陶芸にはまってしまったのである。

これが、地獄へ続く一本道と知っていたら手を出したりはしなかったのだが、つい足を踏み入れてしまったのである。もう、もどれない。

某山中にガス窯、電気窯などを置いて二カ月に一度ずつ、もう四年近くもそこに通って友人四人と土をいじっている。師匠がいるわけではなく、みな自己流。まだ下手。行ったら土をこねなければならないのだが、目の前にいい川があるものだから、すぐ釣りに行ってしまい、夜は夜でお酒を飲んで盛りあがってしまうのである。

なかなかうまくならない。

「失敗こそがおもしろい」

勝手なことを言っているのである。

メンバーは、デザイナー、ライター、編集者、作家　皆その道のプロ。

「なんだ、おれたちで本が作れるじゃない」

というわけで、『陶素人』（とうしろう）という楽しい陶芸の本を出すことになってしまったのも、酒の上のノリである。

刊行は今年の十一月。ひとつよろしく。

ご存じ大人気の陰陽師シリーズ!!

『陰陽師』　単行本1233円　文庫476円
『陰陽師　飛天ノ巻』　単行本1238円　文庫448円
『陰陽師　付喪神ノ巻』　単行本1233円　文庫476円
『陰陽師　鳳凰ノ巻』　単行本1286円（いずれも税別）
文藝春秋

ご存じ大人気の陰陽師シリーズ!!
平安時代を舞台に、陰陽師・安倍晴明が盟友・源博雅とともに魑魅魍魎に挑む、前人未到の異色伝奇ロマン。
NHK総合で好評放映中、今秋映画化東宝系全国ロードショー。

晴明、博雅　花の宴

夢枕　獏

『陰陽師』は、不思議な売れ方をした本である。

一九八六年から連載を始め、一九八八年に第一巻が出た。二巻目が出たのが、七年後の一九九五年である。この間『陰陽師』の第一巻は、少しずつ少しずつ、一度も店頭から途切れることなく売れ続けていたのである。

普通、文庫が出れば単行本の動きは止まるものだが、文庫が出てからも売れ続けた。けして、今日のブームのような派手な動きではなかったのだが、同じペースで世に出続けていたのである。このペースに加速度がついたのは、岡野玲子さんが漫画化して下さったあたりからである。

それにしても、源博雅という漢（おとこ）は、なんと可愛げのある人物なのであろうか。源博雅という漢によって、安倍晴明のみならず、『陰陽師』という作品世界そのものが救われているのではないか。晴明と蘆屋道満に、もし差があるとすれば、それは、自分の傍らに、源博雅という存在があったかどうかというところであろうと思っている。

「なあ、晴明よ」

博雅は、この天地について晴明に問いながら、もうその答をわかっている。

「なんだ、博雅」

答えながら晴明は博雅が傍にいる時、安心しきっている。

そういう様子が手に取るように見えてくる時が、書いていて楽しい時である。

「ゆこう」

「ゆこう」

そういうことになった――これをあと十年は続けたい。

もうひとつ書いておけば、同じ文藝春秋で、『腐りゆく天使』という、萩原朔太郎をモチーフにした、なんとも美しい淫靡なファンタジーを書いてしまった。

こちらもあわせて読んでいただければ嬉しい。

400万部を超えるベストセラー――夢枕獏 サイコダイバー・シリーズ

サイコダイバー・シリーズ18
新・魔獣狩り6
〈魔道編〉 本体800円 祥伝社
執筆開始から22年！
超伝奇小説の金字塔、好評発売中

永久運動体　夢枕獏

"闇の中で、風が騒いでいる"

この物語の一行目を、このように書き出したのは、二十二年前の春である。

「バイオレンスとエロス・超伝奇」この物語について、業界的にはこのようなキャッチが付けられ、新書伝奇小説ブームのまっただ中で、ぼくはこの物語を書き続けてきた。

今、当時のブームは去り、あれほど新書ノヴェルスの世界を席巻していた伝奇小説群は、現在は別のものに変貌している。あいかわらず、当時のテンションでこういった物語を書き続けているのは、畏友菊地秀行とぼくを含め、ごくわずかの作家のみである。

精神（サイコ）・ダイバー――人の意識の中に潜り、情報を盗んでくるのが職業である。協会に属さないダイバー九門鳳介が、一千年以上も昔に即身成仏した空海のミイラング中に精神（サイコ）ダイビングをして、不老不死の秘密をさぐる――それに、巨漢文成仙吉、無痛症の美しい僧美空がからんでくる。そういう物語として、この小説はスタートした。

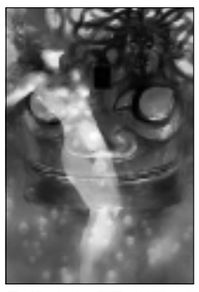
しかし、いくら書いてもいくら書いても終わらない。最後のシーンは十年以上も前から頭の中にあるというのに、まだそこにたどりつかない。

話は今、日本の古代史から中国史にまでおよんでいると ころである。この先のことを考えると、気が遠くなりそうになる。しかし、それでもひたすら書くこと以外にぼくにできることはないのである。

永久に書き続けられ、永久に終わらないことこそが、物語の真のありかたではないかとも思う。書き手にできることは、その一行目を書き出すことだけではないか。二十二年前に書いた一行目の責任を永久にとり続けること――ぼくにできるのはそのことくらいである。

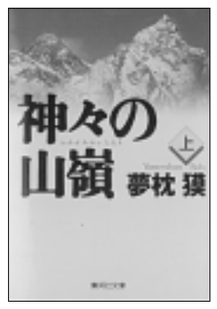
あと十年、ぼくの寿命がありますように。

サイコダイバー・シリーズ最新刊
シリーズ19巻目、5月31日発売
新・魔獣狩り7〈鬼門編〉
本体800円 祥伝社


最新刊 カバー原画／加藤直之

神々の山嶺（いただき）

写真・夢枕獏
上・本体724円　下・本体800円
文庫版



神々の山嶺（いただき）

作・夢枕獏　画・谷口ジロー
本体1000円
①コミック版
集英社

山岳小説の新たなる古典
構想二十年、千七百枚の大ロマン
第十一回柴田錬三郎賞受賞作品
ビジネスジャンプで好評連載中！

遥かなる頂に

夢枕獏

発想してから、書き出すまで、およそ二〇年かかってしまった。

書きたくて書きたくてたまらなかったのだが、取材不足と、自分の力不足がわかっていたので、どうしても書き出せなかったのである。ヒマラヤへ何度も足を運び、ようやく書き出した時には、二〇年が過ぎていたのである。山の話を書かないかという話は時おりあったのだが、どこにも一本も書かずに、すべてのアイデアとリビドーを、この『神々の山嶺』のためにとっておいたのである。

たまりにたまった二〇年分を、この一作に全て使いきってしまった。

多くの話は、書き終えた時に、あれをこうしておけばよかった、あそこはこうであった、まだまだ書きたかったという思いが残るものなのだが、この物語に限っては、そういうことが何もなかった。

世界の最高峰――ヒマラヤのジャイアンツ。

エヴェレストの頂に男が登ろうとするただそれだけのシンプルな話である。どまん中の山の話だ。

一九二四年の六月に、マロリーとアーヴィンという登山家が、エヴェレスト登攀（とうはん）中に行方不明になっている。このふたりの姿が最後に目撃されたのは、頂上にあと数百メートルという場所である。ふたりが、頂上に立った後、遭難した可能性が高い。もし、そうならば、ヒマラヤ登攀史は、根底から書きかえられることになる。ふたりは、頂上に立ったのか、どうか。それを知る方法が実はある。ふたりは、カメラを持って出かけているので、彼らの屍体を発見し、持っているカメラのフィルムを現像すればいいのだ。頂上に立っていれば必ず写真に撮ったに違いないからだ。

そのカメラが、一九九三年、ネパールのカトマンドゥーで売られていた――これが、この物語のスタートである。

現在、谷口ジロー氏によって漫画化されている最中である。谷口さんの圧倒的な画力があって初めて漫画化が可能であった。

ぼくはこの本のあとがきに次のように書いた。

「全て書きました。

残ったものはありません。」

キマイラⅣ

涅槃変／鳳凰変

作家・夢枕獏の原点であり、いまも熱い執筆が続く大長編。
シリーズ最新巻！　装画・天野喜孝

定価一七八五円（税込み）
朝日ソノラマ　五月中旬刊
（Ⅰ～Ⅲ既刊。以下奇数月に刊行）

長い物語を書く至福

おそらく、この物語の中には、夢枕獏という書き手の全ての要素が入っているのではないか。『陰陽師』も、『鮎師』も、『涅槃の王』も、『闇狩り師』も、『上弦の月を喰べる獅子』も、あらゆるものがこの物語の中に結晶として、あるいは混沌（カオス）として入っている。

一九八二年に第一巻が出て、それから九年。二五巻を書いて、まだ終らない。今、二六巻目を書いている最中である。

ぼくの長い話にどれも共通することなのだが、すでに、この物語に主人公は存在しなくなってしまっている。いるとすれば、物語の全ての登場人物たちである。リヤカーの仙さんも、直壁雲斎も、九十九三蔵も、久鬼玄造も、詩人岩村賢治も、菊地も、宇名月典善も、誰もが愛しくなってしまっているのである。

大鳳吼、久鬼麗――この美しい少年の体内に潜む幻獣キマイラの秘密をめぐって、話は今、過去へと遡っている最中である。

この物語も、ラストシーンの映像は頭の中にあるというのに、どうやったらそこまでたどりつけるのか、二九年たっても見当さえついていない。どれほどの高みにまで登ってきても、頂はまだ、遥かな彼方にある。登れば登るほど、怖くなる。この物語が要求してくるものに、ぼくという書き手がどこまでついていけるのか。この物語にとって、自分という書き手が本当にふさわしい人間であるのか。そういう不安と、常に闘いながらキマイラを書いているのである。

おそらく、ぼくにとって、最終的にこれが最長の物語になるのではないか。

なんとしても、この物語が要求してくるレベルと長さについてゆきたいと、書き手として心から願っているのである。

今回、ハードカバー版で『キマイラ』を出しているのは、ソノラマ文庫のこの物語を、一巻からそろえて置いてある書店が極めて少ないからである。一巻が出てから二〇年後の新しい読者に、初めからこの物語を読んでもらいたいからである。そのため、あらたに加筆し、密度を高くした。

どうか、この物語を読んでいただきたい。

『陰陽師』が好きな方は、ぜひ読んでいただきたい。『餓狼伝』が好きな方も、『ねこひきのオルオネラ』が好きな方も、『カエルの死』が好きな方も、ぜひ読んでいただきたい。失望させないこと、ぼくが保証します。

間違いなく、おもしろいです。

株式会社朝日ソノラマ
〒104-0061
東京都中央区銀座6-11-7オリコミビル
電話03-3572-3180
ホームページURL／
http://www.asahisonorama.co.jp/